

目次

ずれた銃声

5

訳者あとがき

263

解説 横井 司

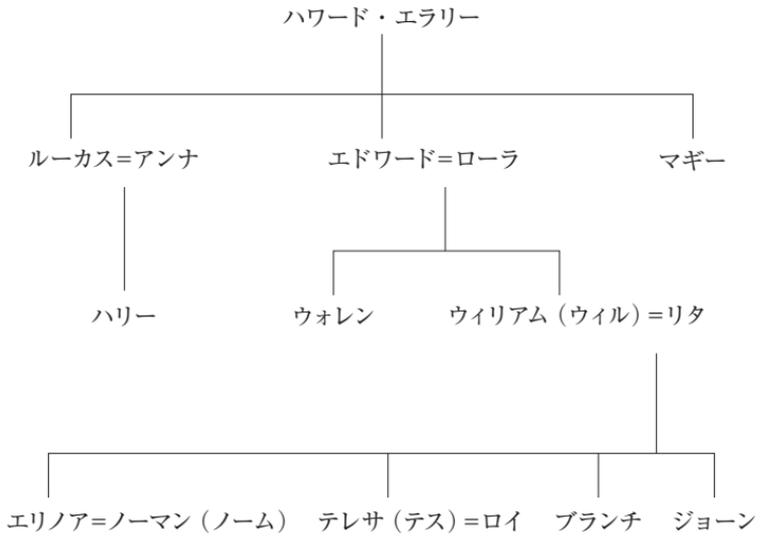
265

主要登場人物

ジエイムズ（ジム）・オニール	コネティカット州ハンプトン郡、州検事局勤務の州警察刑事
マーガレット	ジムの妻
アンナ・エラリー	ウォレントンの旧家、エラリー家の女主人
ウィリアム（ウィル）・エラリー	アンナの次男
リタ・クビアック	ウィルの妻
エリノア・デルメイン	ウィルの長女
ノーマン（ノーム）・デルメイン	エリノアの夫
テレサ（テス）・マーティン	ウィルの次女。エリノアの双子の姉妹
ロイ・マーティン	テレサの夫
ブランド・エラリー	ウィルの三女
ジョン・エラリー	ウィルの四女
マギー・エラリー	アンナの義妹
ローラ・エラリー	アンナの義妹
ハリー・エラリー	ローラの息子
エッタ・モーズリー	ローラの家政婦
クルーズリー	エラリー家の主治医
マッジ・ランキン	エラリー家の隣人

ずれた銃声

エラリー家系図



第一章

コネティカット州ハンプトン郡の州検事局に勤務する州警察の刑事、ジム・オニールは、六月下旬のある朝、オフィスのデスクに座っていた。普段に比べてデスクの上は片付いていて、電話も鳴らなかつた。現在、ジムが担当している重要事件は四件だけだ。デスクに広げているのは、そのうちの一つ、凶器を用いた暴行事件の報告書だつた。最初の報告は、病院に搬送された被害者は順調に回復中だというもので、次に、容疑者のねぐらであるブリッジポートの下宿屋を特定したものの、その日の明け方に逃亡を許した、とあつた。

型どおりの事件だ。ジムはあくびをし、書類を押しやった。一両日中にも被疑者は逮捕され、秋には高等裁判所に送られるだろう。そして口論にスパナでけりをつけようとした報いとして、州刑務所に数年間収監されるのだ。

頭の後ろで腕を組んで椅子に背を預け、郡裁判所内にあるオフィスの窓から外を眺めた。夏の明るい陽ざしが降りそそぐ暑い日で、屋内で過ごすにはもつたない陽気だ。こんな日は家に帰ってランチを食べ、午後、妻のマーガレットと幼い娘のサラを連れてどこかに出かけたらどんなに楽しいだろう。この際、数時間休ませてもらつてもバチは当たらないのではないか？ インカーマン事件で昨日まで働きづめだったのだ。家族をないがしろにしてばかりもいられないではないか。

暴行事件の報告書をそそくさとファイルに押し込み、デスクの引き出しに鍵を掛けて部屋を出た。オフィスの外で足を止め、そこに座っている秘書に声をかけた。「ジェニー、ちょっと家に帰るよ。一時間かそこらに何かあったら自宅に連絡してくれ。そのあとは、たぶん七時か七時半くらいまで外出すると思う。四時頃、一度電話を入れるよ。いいよな？」

ジムのもとで、すでに何年か働いているジェニーは言った。「ごゆつくり。そろそろ、午後休むくらいしてもいい頃ですよ」

ジムはにやりと笑った。「さすがだね、ジェニー。何でもお見通しだ」

自宅まで十二マイルの道のりを、車で戻った。一年前、三歳のサラをハンプトン郊外よりもこぢんまりしたコミュニティで育てたいというマーガレットの強い意向を汲んで自宅を売却し、ウォレントンに新居を購入したのだった。そして特徴のないレンガ造りの家だったが、マーガレットは大喜びでガーデニングを始め、地域の活動に参加し、自宅の修繕や改良でジムをせっついた。サラが安全に遊べるよう、裏庭の一面をフェンスで囲ったのもその一環だった。

都会育ちのジムは、この引越したに複雑な心境を抱いていた。町の住民全員と知り合いというのも善し悪しだ。車での通勤時間も長くなったし、ウォレントンには、ジムに加わってもらいたがっているクラブや市民組織がいくつもあった。商店街にでも行くものなら、何人もの人に呼び止められて捜査中の事件について質問攻めに遭うことも珍しくなかった。

とはいえ、家は快適で、ウォレントンもいい町には違いなかった。前の週に動力芝刈り機を買ったので、芝刈り——自宅の敷地はせいぜい幅九十フィート、奥行き百八十フィート程度なのは重々承知していたが、いったい何エーカーあるのだろう、とジムはいつもこぼしていた——も、去年ほど大変

ではなくなるはずだ。

ウォレントンの町に入り、ジムは満足げに雲一つない空を見やった。干ばつの心配は農家に任せよう。この天気が続けば続くほど、芝生の手入れの心配は減る。草が乾いた茶色い庭を何の懸念もなく眺められるということだ。

車を自宅の私道に乗り入れ、クラクションを軽く鳴らした。

妻のマーガレットは、ちょうどサラの遊び場のゲートを開けているところだった。振り向いてうれしそうな笑みを浮かべ、ジムのもとへ駆け寄る妻の後ろから、サラがおぼつかない足取りでついてきた。

「お帰りなさい！」と、マーガレットが呼びかけた。「でも、どうしてこんな時間に帰れたの？」

ジムは車の窓から身を乗り出し、妻にキスをした。「午後、休みを取ったんだ。どこか田舎に出かけないか、サラと三人で」

それは、帰る道々、ジムが楽しみにしていた瞬間だった。マーガレットが彼に抱きつき、あなたは家族思いの最高の夫だわ、と言うのだ。

ところが、妻の顔には明らかな動揺の色が浮かんできた。「まあ——ええと——そうね、すてきなアイデアだわ。たぶん、なんとかできると思う——夕方だったら」

「それって、どういう——」

「おかえりなさい、パパ。これ、みて——」サラが、ドアハンドルを懸命に引っ張った。「みて、パパ」と汚れた手を差し出す。指に薄桃色のミミズが巻きついていていた。

「サラ、お願いだからミミズで遊ばないでちょうだい」マーガレットが娘を諭した。「ミミズは土の

中にいるものなのよ。作物が育つお手伝いをするの……実はねジム、もうじき、ヘレン・ソーンダーズとレノア・アクスリーが来ることになってるの。婦人協会の広報の話し合いがあつてね——秋に資金集めの活動するのは知ってるでしょう」

「さあね、知らないよ……サラ、パパにそのミミズをくれないか」ジムは車を降り、妻への返答のよそよそしさでできるだけ消すよう努めながら娘に話しかけた。

「だめ」サラはミミズを握り締めた。「サラがみつけたの。サラのなんだから」

「わかつたよ、それはサラのだ。そのミミズをどうするんだい？」

「ジム、私が広報部の仕事をしているのはよく知つていないの……サラ、何を口に入れたの？ あら、ごめんなさい、てつきり……ねえジム、今から電話して、来るなどは言えないわ。私からお茶に誘つたんですもの。なるべく急いでお茶を出せば、四時半頃には出かけられるんじゃないかしら。サラにお昼寝をさせなければならぬから、どっちにしても三時までは出られないし」

マーガレットは夫と腕を組み、家のほうに足を向けた。「前もつてわかつていたら、明日に延期することもできたのに」と、もつともな感想を口にした。

「婦人市民向上協会が何だつていうんだ」ジムは落胆した。妻に手痛い傷を負わされた気分だった。妻と娘を連れて出かけようと思つて大急ぎで帰ってきたのに、マーガレットときたら……。

ジムは、嬉々として自分を見上げる娘に目をやった。屈み込んでサラを抱き上げ、宙高く持ち上げる。サラがキャッキヤと笑つて両手を広げたので、ミミズはジムの額に落下した。ジムは思わず小声で悪態をついて、それを払い落とした。

「サラのミミズ！ いなくなつちやつた、パパ」

「あとで別のを見つければいいさ」

マーガレットが先に立って家の中へ入った。「サラに、ベイクドポテトとキューブステーキを食べさせたところなの。缶のスープを開けてあげるわね。私はクリームチーズとピーナツバターのサンドイッチにミルクで済ませるつもりだったんだけど、あなたはそれじゃ嫌でしょうから」

「ああ。クリームチーズとピーナツバターのサンドイッチなんてのは食べる気にならないな。ぜひともスープにしてみらおう」

朝食用アルコールに座り、サラを膝に乗せた。キッチンは涼しく、居心地がよかった。マーガレットに腹を立てるのは筋違いだ。まさか自分が帰ってくるとは思わず、午後の予定を入れてしまっただけなのだから。ジムは機嫌を直して言った。「そのうち、スープ会社の人に礼状を書かなきゃいけない。いつもランチをありがとう、って」

マーガレットは笑った。「だったら、全員に出さなくちゃね。これまでに全種類食べてるもの」

「パパ、ミミズもしんだら、ひとみに、てんごくにいくの？」と、サラが訊いた。

ジムは少し考えてから、正直に答えた。「わからないな」

「でも、かみさまがいいっていったら、いけるんでしょ？」

「ああ、そうだね」

「考えたんだけど」ランチを食べ始めてすぐ、マーガレットが言った。「午後、ガレージ脇の格子^{トレリス}垣にもう一度ペンキを塗ってもらえないかしら。窓枠を塗ったときのがほとんど一缶残ってるし、格子垣には二度塗りが必要ですよ。一時間もかからないでしょうから、終わってシャワーを浴びる頃には――」

「嫌だよ！」ジムは妻の言葉を遮った。「格子垣のペンキ塗りをするために午後、休みを取ったわけじゃない。昨日、君が図書館で借りてきた本の中からよさそうなのを探して、庭の木の下でロングカクテルを飲みながら、のんびり読書でもするよ。お客が帰ったら二人でデイナーに行こう。でも出かけるのが遅くなるから、パムが子守りに来てくれるかどうかオールドフィールドの奥さんに確認したほうがいいな」

こうしてジムは、思い描いていた家族水入らずののどかな午後を自ら諦めたのだった。

電話をかけたマーガレットが戻ってきて、パムは公園のプールに泳ぎに行っているが、夕方なら大丈夫そうだと報告した。そして昼寝をさせに、サラを二階へ連れて上がった。昼食を食べたばかりで、カクテルを飲むには早すぎると思い直し、ジムはリビングに行つてマーガレットが図書館から借りてきた本のタイトルにざっと目を通した。ウインストン・チャーチルの『彼らの最良の時』に目が留まり、手に取った。もう少し軽いものが読みたくなつたときのため、推理小説も一冊選んだ。

裏庭に出て、いちばん大きなカエデの木陰に腰を落ち着けると、チャーチルの本の謝辞をちらっと見ただけで脇へ置き、推理小説を開いた。「ガートルード・モルトビーは崩れ落ちるように椅子に座り、たつた今読んだ匿名の手紙を床に落とした」という一行目の文も読み終わらないうちに、隣家の庭から声をかけられた。

「やあ、ジム！」

顔を上げると、中年で小太りのジョージ・オールドフィールドがこちらへ向かつて歩いてくるところだった。オニール家の私道を横切るのを待って、ジムは無表情に「やあ」と返した。

「ジム、実は困つたことになっているんだ」と、ジョージは足早に近づきながら言った。「本当にま

いったよ。奥さんから君が午後休みを取ったと聞いてマーサに言ったんだ。これこそ、問題を解決してくれる救いの手だ、ってね」

「そうなのか？」ジムの口調に警戒心がにじんだ。傍らの椅子を指し示す。「まあ座れよ、ジョージ」ジョージは椅子をまたぐように座り、「そうだと、まさに救いの手さ」と繰り返した。「ネイト・チェザリーが今日の午後、埋葬されるのは知ってるだろう。彼は退役軍人会に所属していて——しかも創設メンバーの一人だったんだが——組織の活動にいつも熱心に取り組んでくれた。金曜の夜遅くに亡くなって、土曜の昼まで奥さんが知らせてくれなかったんだ。その頃にはもう、メンバーの半分は週末で出払っちゃってた。ゆうべ、もう一度あちこち連絡してみたが、まだ戻っていなかったり、こんなに急では仕事の都合がつかなかったりでな。それでここに来たってわけだ」——ジョージは大げさに両腕を広げてみせた——「弔銃隊のメンバーが一人足りなくてね。午前中ずっと電話にかじりついていたんだが、名簿を全部当たっても、どうしても一人足りないんだよ！」

「まさか、私にやれって言うんじゃないよな」ジムはすかさず、釘を刺した。「お役には立てないよ。君らの会のメンバーではないし、そもそも退役軍人じゃないからね」

「知ってるさ。だが、代理はできるだろう？　なんとたつて警察官だ。少なくとも銃の扱いには慣れている。メンバーの帽子と腕章をつければ、誰にもわかりやしないさ」

椅子に深く沈み込んだジムは、体じゅうで抵抗の意を示していた。「悪いが、力にはなれないよ、ジョージ。会に属していないから、手順も知らない。へマをやらかして迷惑をかけるのが落ちだ。やっぱり無理だよ」

「なあ、俺がどんなに困っているか考えてくれよ」ジョージが懇願した。「俺は人事担当指揮官なん

だ。メンバーを揃える責任があるのに、ドツポにはまっちゃった。頼む！手を貸してくれ。本当に困ってるんだよ！」

実際、ジョージの丸顔は必死の形相だった。「もし君が困ったときには、きっと力になるから」

ジムはふさふさした黒髪を指でかき上げて首を振り、「無理だ」と、はっきり断った。「申し訳ないが、協力はできない」

そうは言いながらも、ジムは内心、困惑していた。懇願を続けるジョージに、そもそも退役軍人会などというものはなくなればいいんだ、とも、三十一年前にたった半年間訓練キャンプに参加しただけの、五十すぎのなまくら商人のために陸軍葬をするなんてばかっている、とも言えなかった。いくら固辞してもジョージはしつこく粘り、とうとうジムは推理小説も快適な椅子も、これから飲もうと思っていたロングカクテルも諦めて立ち上がり、自宅に向かったのだった。

「急いで支度をしてくれるかい？」ジョージが背後から呼びかけた。「今、二時半だが、葬儀はスタージェス葬儀場で三時に開始予定だ。少し前にスタンバイしなけりゃならない。準備ができれば知らせるよ」

「わかった」ジムはぶっきらぼうに応えた。

「助かるよ。そのうち、きっと恩返しするからな」

「ぜひ、そうなつてもらいたいもんだ」と小声で言いながら、裏庭から家へと続く階段を上った。「こつちと同じくらい大きな犠牲を払ってくれることになるといいがな」

マーガレットが来客に備えてリビングを片付けていた。ジムはドア枠に寄りかかり、せつかくのオフが台無しになったことをしきりにこぼした。

「あなたがあの帽子をかぶって、ライフルを持つのか？」マーガレットの目に笑みが差し、口角が上がりかけたが、なんとかそれを抑え、同情するように言った。「残念ね。ようやく自分の時間が取れたっていうのに」

「残念なのは、君がマーサに、私が午後家にいると漏らしたことだよ」と言い返した。「そのせいで、こうなったんだからね」

「でも、あなたの車が私道に停まってるじゃない。家にいるのは一目瞭然よ。それにバムにサラの子守りを頼もうと電話したら、どうしてあなたが仕事に行っていないのかマーサに訊かれたから、正直に答えたの。だって、葬儀や弔銃隊のことなんて知らなかったんですもの」

「そうだな」と、ジムは認めた。「確かにそのとおりだ。だが、それにしたって——」

さらにぶつぶつとこぼしながら、ジムは廊下を抜け、二階にある夫婦の広い寝室に上がった。向かいのサラの部屋のドアが少し開いていたので、中を覗いた。サラはすでに眠っていて、くたびれかけたゾウのぬいぐるみを抱き締めたその頬に、黒い睫毛まげが緩やかな弧を描いていた。ほのほのする娘の姿に、父として心とろける思いを抱き、いくらか気を取り直して自室に戻った。

スタージェス葬儀場の外で帽子と腕章を身に着け、米西戦争時代のものと思われるライフルを手にしたジムは、ネイト・チェザリーの遺体が運び出されて階段を下りてくるのを、ほかのメンバーとともに待っていた。弔銃隊の面々は、小声で喋りながらリラックスマードだった。開いた窓から録音の賛美歌が漏れ聞こえてくる。霊柩車が縁石のそばに停まっており、運転手が車を降りて葬儀屋の助手の一人と打ち合わせをしていた。参列者の車が並ぶ先に延びるクリントン・ストリートは木陰の並木道で、走る車もなく、午後の陽ざしのなかで平和そのものだった。

弔銃隊のメンバーたちは、ジムも名前くらいは知っている、ウォレントンの名士である女性に関する噂話に興じていた。ジムはほとんど聞き流していたのだが、話の中に出てきた男の苗字に、にわかに興味を掻き立てられた。「レックだつて？」と訊き直した。「うちの通りに住むラス・レックか？」

「ああ、そいつさ」と誰かが答えたのと同時に、ジョージが号令をかけた。「気をつけ！」

それなりの機敏さで、隊は歩道の両側に整列した。ラップ手が背後で出番を待つてうろろしている。葬儀場の両開きの扉が大きく開き、ストライプのズボンと黒の上着姿でグレーの手袋をはめた葬儀屋のスタージェスが重々しく姿を現した。脇へ一歩下がりを、参列者を戸口へ誘導する。当然ながら、このとき、ジムがアンナ・エラリーに気づくことはなかった。背筋を真つすぐに伸ばした細身で白髪その女性、それぞれの車に乗り込もうとする故人の縁者や友人の一人でしかなかったのだ。

最後の会葬者が出てくると、辺りが一瞬静まり返った。ジムの隣に立っていた弔銃隊の一人、ジェイク・フリートウッドがささやいた。「さつき話していた女がいるぞ。葬儀に参列したんだな」

ジムはささやき返した。「夫が海軍で海外派遣されているときに、どうしてレックと浮気なんてできさるんだ？ レックだつて海軍にいたんだろうに」

「違うね」フリートウッドは口元を動かさないようにして言った。「レックは海軍にいたんじゃない。ガブリエル夫人の寝室にいたのさ」

棺が階段を運ばれてきた。冗談の時間は終わりだ。ジムは神妙な面持ちで、歩道を挟んで真向かいに立つメンバーの顔を見つめた。

ノース墓地はウォレントンで最も古く、中心地から一マイル離れた町外れにある。緩やかな丘の斜面に広がる敷地の北側と東側には数軒の住宅が、裏には樹木に覆われた峡谷があり、南側はこんもり

した森に面していた。チェザリーの墓は墓地の端、森のすぐそばだった。

埋葬の儀式が始まると、大きな雲に太陽が隠れた。儀式が終わる前に急に風が吹きだし、遠くで鳴っていた雷の音が近づいてきた。牧師の声が途切れて一瞬、間があき、墓を囲む一団は暗くなった空にちらりと不安そうな視線を向けた。

「装墳！」^{まうてん}ジョージがきびきびした口調で号令をかけた。

ジムは緊張で汗がにじんだ。銃が詰まってしまったらどうしよう。もしも空砲がうまく入らなかつたら？

銃は詰まらなかつた。空砲はスムーズに入り、ボルトがカチリと音をたててはまった。

「弔銃用意……撃て！」

一斉射撃はばらついた。最後の発射音のこだまがまだ消えていないなか、フリートウッドがジムの耳元でささやいた。「これじゃあ、まるで各個射撃だな」

「装墳……用意……撃て！」

今回はさらにひどかった。一発だけ、ほかより一秒は遅れたのだ。

「装墳……用意……撃て！」

三発目の発射音が丘の斜面に反響したときになって、ジムは左手の奥のほうでちよつとした騒ぎが起きているのに気がついた。

「エラーリーの婆さんだ」弔銃隊の一人が呟いた。「気を失ったんで、ノーマン・デルメインが車に運んでいる」

喪服姿のぐったりとした白髪の女性がノーマン・デルメインに抱きかかえられ、別の女性が先に立

つて車に駆け寄りドアを開けるのを、ジムは目の端で捉えた。

騒ぎはそれで収まった。ラツパ手がラツパを唇に当て、葬送のラツパを吹いた。その音を雷鳴が吹き消し、空に稲妻が走った。葬儀が終了すると、参列者は雨が降りださないうちにそれぞれの車へと急いだ。

雨は、なんとか最後の一台が墓地を出るまで降らずにもった。土砂降りになったのは短時間で、ジムがジョージの車を降りて芝生を横切り、わが家の玄関にたどり着く頃にはもう弱まっていた。

マーガレットの客が帰り支度をしていた。サラは、すでにパムが自宅に連れていったとのことだった。雨がやみ、婦人市民向上協会の二人は帰っていた。

時間は四時半になっていた。アイステイーのグラスとケーキ皿をトレイに載せてキッチンへ運ぶ妻のあとについて歩きながら、ジムは葬儀の様子を詳しく話して聞かせた。マーガレットは、着ている薄手のドレスに目をやった。

「ちよつと着替えるわ。雨が降ったら急に涼しくなったから、スーツにしようかしら……。ガブリエル夫人とラス・レックの話は眉唾物ね。彼女は婦人協会のメンバーなのよ」

「婦人協会に入っていると浮気はしないって言うのかい？ 両方は成り立たないのかな」

マーガレットが笑った。「つまり、そんな人には見えないってことよ。まあ、わからないけど——」二人は仲良く二階へ上がり、マーガレットがスーツに着替えて化粧直しをするあいだ、ジムはベッドにゆつたりと寝そべった。今度は彼女が午後のお話をする番だ。婦人協会を悩ます問題について、妻は夫に報告した。

マーガレットは寝室とバスルームのあいだを忙しく行き来した。「信じられない人たちがいるのよ」

と言いつつ。「町の誇りつてものがないんだわ。私たちがやろうとすることに反対するしか能がないの。例えば、商店街の外観を改善したほうがいい、って商工会議所に提案した件がそう。店主たちは一人として——」

ベッド脇の増設電話が話の腰を折った。ジムが屈んで受話器を取った。「もしもし。はい、私です」クローゼットにいたマーガレットは、ハンガーからスーツのジャケットを外していた。ジムが言った。「何ですって？ チェザリーの葬儀ですか」

その口調で充分だった。マーガレットは諦め顔でジャケットを戻した。事件が起きたに違いない。つまり、ディナーはお預けということだ。

「わかりました、すぐに行きます」と言つて、ジムが受話器を戻した。その顔は落ち込んでいた。「ウォレントン警察署長からだ。今日の午後、アンナ・エラリーが葬儀で撃たれたそう。私の目と鼻の先で。私も含め、誰もが彼女は氣を失ったのだと思った。家族が家に連れ帰って主治医を呼んだら、医師は死因を心臓発作と断定したらしい。今、遺体はスタージェス葬儀社に保管されているんだが、五分前にスタージェスが署長に、背中に銃痕があると電話してきたそう」

ジムは立ち上がり、上着を羽織った。「私の目と鼻の先だったんだ」と繰り返した。「どうしても行かなくちゃならない」

「そうね」と、マーガレットは言った。

〔著者〕

ドリス・マイルズ・ディズニー

アメリカ、コネティカット州、グラストンベリー生まれ。グラストンベリーの学校を卒業後、保険会社などで働く。1943年、A Compound for Deathで作家としてデビュー。創作したシリーズ・キャラクターに、保険調査員ジェフ・ディマルコ、郵便監察官デイヴィッド・マッデン、州検事局刑事ジム・オニールなどがある。

〔訳者〕

友田葉子（ともだ・ようこ）

非常勤講師として英語教育に携わりながら、2001年、『指先にふれた罪』（DHC）で出版翻訳家としてデビュー。その後も多彩な分野の翻訳を手がけ、『極北×13+1』（柏艸舎）、『カクテルパーティー』、『血染めの鍵』（ともに論創社）、『ショーペンハウアー 大切な教え』（イースト・プレス）をはじめ、多数の訳書・共訳書がある。津田塾大学英文学科卒業。

じゅうせい
ずれた銃声

——論創海外ミステリ 231

2019年4月20日 初版第1刷印刷

2019年4月30日 初版第1刷発行

著者 ドリス・マイルズ・ディズニー

訳者 友田葉子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1816-0

落丁・乱丁本はお取り替えいたします